

いのち
生命のにぎわいとつながり

No. 70

令和3年6月

今年も夏が始まりました。夏といえば海。千葉県海辺には、極彩色の様々なウミウシの仲間が暮らしています。本号では、海の宝石・ウミウシの世界に皆様をご案内いたします。

海の宝石 — ウミウシ



ミアミラウミウシ (体長 約25mm)

カラフルな色彩や模様、多様な形で『海の宝石』とも呼ばれ、スクーバダイビングの愛好者には以前から人気の生き物のウミウシ。最近ではダイバー以外にもずいぶん知名度が上がっているようです。数多くの種類が掲載されたウミウシの図鑑や写真集が複数出版されているほか、ウミウシのフィギュアやウミウシをモチーフにした様々な商品も目にすることができます。今回は、そんな人気者のウミウシをご紹介します。

CONTENTS

- 1 海の宝石 — ウミウシ 1
- 2 『湖沼・川・水路に水草を捨てないで!』を発行しました 3
- 3 生命のにぎわい調査団の現地研修会を開催しました 3
- 4 「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞 ～御宿町ミヤコタナゴ保存会～ 4
- 5 千葉県の希少種 (イシモチソウ) 4

ウミウシはどんな生きもの？

ウミウシは軟体動物の巻貝の仲間です。巻貝のうち、これまでの分類体系で後鰓類と呼ばれていた仲間が、一般にウミウシと呼ばれる動物です（注を参照）。この仲間は他の巻貝類と体内部のつくりが異なるほか、貝殻が退格的であったり全く持たなくなったりした種が多く含まれるという特徴があります。一般に体は柔らかくナメクジ状で、触角や鰓、体表の突起などの有無をはじめ、体形や大きさは多種多様です。「ウミウシ」の名前は頭部に2本の触角を持つ様子を牛の角に見立てたものと思われそうですが、すべてのウミウシに触角があるわけではありません。



勝浦の磯で採集したウミウシの仲間。上段左からベニシボリ、キイロウミコトショウ、ホウズキフシエラガイ、ヒロウミウシ。下段左からゴマフピロウドウミウシ、アオウミウシ、オトメウミウシ、サガミノウミウシ、オトメドリガイ。

注：近年の系統学的な研究の進展で、軟体動物の分類体系は大きく変わりつつあります。これまで後鰓類に含まれていたいろいろな種は一つのまとまった分類群に属するものではなくなってしまい、ウミウシというグループが簡単には定義できなくなってきています。ここでは、従来の分類体系で後鰓類と呼ばれていたものをウミウシとすることにします。

どのくらいの種類がいる？

ウミウシの仲間の種数は、世界で5,000~6,000種と考えられています。日本近海から知られているウミウシの種数はかなり多く、日本産のほとんどの既知種を収録した書籍には約1,400種が掲載されています。現在でも、新種が記載されたり、日本初記録種が見つかったりすることは珍しくなく、日本産の種数は今後さらに増えるでしょう。千葉県からは、千葉県産軟体動物目録に掲載された約380種の記録がありますが、ダイビング愛好者の撮影した写真に

はこの目録に未掲載の種も少なくありません。今後の調査で、千葉県産のウミウシの種数も大幅に増えそうです。



キイロイボウミウシ（体長 約50mm）



ハナオトメウミウシ（体長 約45mm）

ウミウシを探してみよう

ウミウシは、寒帯から熱帯、潮間帯から深海までの様々な環境の海に生息しています。私たちが目にするウミウシの写真は、スクーバダイビングで撮影されたものがほとんどですが、ダイビングをしなくても、潮の引いた磯でいろいろなウミウシを観察することができます。勝浦市の海の博物館近くの磯で行われるウミウシの観察会では、毎回約2時間の観察で20種前後のウミウシが見つかります。現在、コロナウイルス対策のためウミウシに的を絞った観察会は休止中ですが、皆さんもまずは潮の引いた磯でウミウシを探してみませんか？自分でウミウシを見つけてよく観察すると、あなたもウミウシ好きになること請け合いです。

（立川 浩之 千葉県立中央博物館分館海の博物館）

『湖沼・川・水路に水草を捨てないで!』
を発行しました

千葉県には、人によって持ち込まれた多様な外来の動植物が生息・生育しており、それらの中には生態系や人に対する被害を生じるものがあります。中でも一部の水生植物は、河川や農業水路、水田等で爆発的に繁茂して水害の原因にもなっています。外来の水生植物を防除する際には、水生植物特有の繁殖様式に注意する必要があり、誤った方法を用いると新たな拡散につながってしまう恐れがあります。そこで生物多様性センターでは、外来水生植物の種類や取り扱う際の注意点について解説したリーフレット『湖沼・川・水路に水草を捨てないで!』を製作しました。

このリーフレットでは、特定外来生物に指定され、かつ緊急対策外来種に指定されているナガエツルノゲイトウ、オオバナミズキンバイ、外来アゾラ類、オオフサモ、ブラジルチドメグサ、オオカワヂシャ、ミズヒマワリ、ボタンウキクサ、スパルティナ属の9種類について解説しています。このうち、ナガエツルノゲイトウは平成2年以降、オオバナミズキンバイは平成27年以降に、印旛沼・手賀沼流域で侵入が確認され、大和田排水機場などの排水施設や農業水路に被害を与えています。他の7種類においても、在来種の生育を妨げるほか、水環境の悪化を招くなどの弊害があり、生態系への悪影響が懸念されています。

外来の水生植物が野外に広がった原因は、種類によって異なりますが、外国から持ち込まれる場合、船舶やその貨物に紛れこんでいたものもあれば、アクアリウムに利用される観賞用植物として輸入されたものもあります。観賞用植物であれば、それを自然水域に広げないように私たち個人が注意することが大切です。

『湖沼・川・水路に水草を捨てないで!』は、生物多様性センターのウェブサイトから無料でダウンロードできますのでご利用ください。

(https://www.bdcchiba.jp/alien/ali_index.html)
(伊左治 鎮司 千葉県生物多様性センター)



生命のにぎわい調査団の
現地研修会を開催しました
令和3年5月19日(水)・23日(日)

今回の現地研修会は白子町^{そりがね}荊金海岸で浜辺の自然を観察しました。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、2日に分けて実施し、19日は12名、23日は39名の団員が参加されました。当日は受付前に検温とアルコールで手指消毒、マスク着用を徹底する等、安心して研修会に参加できるように努めました。

19日は1班で行動し、2日目は参加人数が多かったため3班に分け、全体会は実施せず、班毎に3地点を移動しながら研修し解散する密を避ける方式としました。

19日は開始2時間くらいで雨が降り始めたので早めの解散となりましたが、23日は快晴に恵まれ、景色の良い研修となりました。

各地点での主な研修内容を以下に記します。

【A地点：海岸植物と浜辺の生き物】千葉県立中央博物館の由良主任上席研究員と千葉研究員を講師に迎え、砂丘に咲くハマヒルガオやハマボウフウを観察し、砂丘が海岸植物に支えられているお話を伺いました。



ハマヒルガオが咲く荊金海岸

【B地点：防波堤の生き物と漂着物】防波堤の生き物として、カキやイワガニを観察しました。漂着した生き物観察ではフグの仲間や生きているハシボソミズナギドリ等、海域の生き物だけでなく、スクミリンゴガイやクサガメなど淡水の生き物の死骸が多いことも分かりました。また、団員が県RL：Bランクのクロズハマベゴミムシダマシを発見し、荊金海岸の魅力を見出しました。



海辺の生き物を観察



浜辺に漂着したハシボソミズナギドリ

【C地点：スナガニの巣穴と景観】スナガニの巣穴を実際に掘り、その構造を観察しました。また、九十九里浜で104年ぶりに再観測した蜃気楼や変形太陽、気象光学現象を写真で解説し、景観的な魅力を研修しました。

一見、広大な砂浜で何もいないようですが、じっくり観察することで浜辺の多様性を様々な角度から研修することができました。コロナ禍ではありますが、充実した時間を過ごせたと思います。機会がありましたら、近隣の海辺へ出かけてじっくり足元や遠くを観察してみてください。意外な発見がありますよ。

(大木 淳一 千葉県生物多様性センター)

「みどりの日」自然環境功労者 環境大臣表彰を受賞 ～御宿町ミヤコタナゴ保存会～

令和3年4月23日に、御宿町ミヤコタナゴ保存会の『「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰』受賞が発表されました。

これは、同会が長年にわたり取り組んできた絶滅危惧種ミヤコタナゴの保全活動の功績が認められたものです。同会は、平成11年より御宿町に生息するミヤコタナゴの保護に取り組み、今日までミヤコタナゴに関する保護の普及啓発活動、保護区内の清掃、生息水路における環境の維持管理、違法捕獲の監視活動等のミヤコタナゴの生息状況回復に尽力してきました。

この表彰は、自然環境の保全に関する顕著な功績があった個人や団体に対して、その功績をたたえとともに、自然環境の保全について国民の認識を深めることを目的に、平成11年度から行われています。心よりお祝い申し上げます。

(村井 貴幸 千葉県生物多様性センター)

千葉県の希少種

イシモチソウ



(千葉県レッドリスト・最重要保護生物A)

植物がバッタに食べられ、バッタがカエルに食べられ、カエルがフクロウに食べられる。自然界には食物連鎖(生き物同士の食べる・食べられる関係性)という厳しい掟が存在しています。しかしこの掟の中で下剋上を果たした植物があります。それが今回紹介するイシモチソウを含む、食虫植物の仲間です。

食虫植物は、葉等が変形してできた捕虫器官という特殊な器官をもっています。捕虫器官は、ベタベタした粘液で絡めとる「粘りつけ式」や、2枚の葉を素早く閉じることで捕らえる「閉じこみ式」など、いくつかのタイプがあります。この捕虫器官でハエなどの小さな生き物を捕まえて消化することで、栄養分として利用することができるのです。こうした性質は、湿原や荒れた野原など、土の中の栄養分が少ない環境で生きていくために身につけたものと考えられています。

そんな食虫植物の1種であるイシモチソウは、日本では関東以西に分布しているとされ、千葉県では主に九十九里平野に残存する湿地に見ることができます。イシモチソウの捕虫器官は「粘りつけ式」で、葉の先端から出る粘着力の強い粘液が「石」を「持ち」上げるほどであることからこの名前が付いたようです。上の写真でもその粘液で小さな虫を捉えているのが確認できます(写真内の赤丸印)。現在は土地の造成や富栄養化などによる生育地の消失に伴って全国的に数を減らしており、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種(NT)、千葉県のレッドリストでは最重要保護生物(A)に指定されています。そんな希少な種ですが、山武市にある「成東・東金食虫植物群落」では、地元ボランティアの方々の努力により生育地が維持されており、5月頃から10月頃にかけてイシモチソウを含め8種類の食虫植物を見ることができます。コロナ情勢が落ち着きましたら、ぜひ訪れてみてください。

(村井 貴幸 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.70 令和3年6月30日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。